

幻灯傘

げんとうがさ



和里かりん

何かが爪先に引っ掛かって、よろめいた途端に、狭い通路に不安定に積み上げてあった箱に手を付いた。そのせいで、箱の山が盛大に崩れ落ち、一瞬にして、辺り一面もうもうと立ち込める埃に包まれた。

「も～気を付けてよね」

煙の向こうから、咳込む俺を気遣う気配など微塵もない彼女の声が言う。

「お宝壊したりしたら、元も子もないじゃない」

「俺の体より、お宝かよ」

「蔵にあるお宝売れば、結婚資金になるかもって言ったの、あんたでしょ。だから、こんな埃っぽい所で、埃まみれになりながら、宝探ししてるんじゃないんですか？」

「へいへい、俺が悪うございました」

付き合い始めて、三年。最近の俺達は、口喧嘩が絶えない。

俺達は近々結婚することになった。言い方が何だか客観的になってしまうのは、多分、俺にその実感がまるでないからなのだろう。

というのも、実を言うと、俺的には、まだまだその気ではなかったからだ。おまけに、先月、不景気のおおりを食って失業したばかりで、収入はないし、預金だってたかが知れている。

それでも、結婚という話になってしまったのは、彼女に子供が出来たから・・・

その事を知ってから、彼女の目の色が変わった。人生気楽に行こうよ的な空気は、彼女の中からきれいに払拭されて、最近、やたらと「人生設計」なんて言葉を口にする。

特に目的もなく、ただ田舎にいるのが嫌で、俺は、家出同然に都会に出た。だから、今まで、敷居が高くて家には戻れなかった。だが、そんな風に敬遠していた実家にも、彼女に引っ張られる様にして、こうして連れて来られる羽目になった。

そして、案の定、人生あまりうまくやっていない様子の俺に、両親が雨あられと降らせた叱咤は、俺を大いにへこませた。

「好き勝手にやればいい」

という父親の捨て台詞と共に、実家からの援助の道はあえなく絶たれた。

そんな俺に、唯一助け船を出してくれたのが、祖母だった。

蔵に、亡き祖父が趣味で集めた骨董の類があるから、好きなものを持っていけばいいと言ってくれた。それで、俺達は宝探しを始める事になったのだ。

「何か、言うほど目ぼしいものないわよねえ・・・」

崩れた箱を積み直していると、彼女の声が聞こえた。それに答える気もしなくて、俺は黙々と箱を片付ける。何だか、こんな風に、目の色を変えて金目のものを物色している自分たちが、急にさもしく思えたのだ。

箱があらかた元の場所に納まって来ると、先刻俺がつまずいたと思しきモノが、床に転がって

いるのが目に止まった。良く時代劇とかで見かける、白い和傘である。

「・・・唐傘・・・っていうんだっけか、こういうの」

古ぼけて、すこし黄ばんでいる辺りが、いかにも年代物という風情がする。

物珍しさも手伝って、俺はその傘を手にとって開いてみた。ばんっという軽快な音と共に、傘が開く。

「・・・でかっ」

思わずそう呟いていた。柄の長さが、記憶にあるものよりも長い様な気がしたのは、気のせいではなかったらしい。広げると、大人が三、四人は入れるのではないかという大きさだった。

「何？その傘のお化け」

彼女も、宝探しに嫌気がさしていたのだろう。俺の手をしているものに興味を示して、傘の中に入り込んで来た。

「・・・傘持ちの持つ奴かな」

「傘持ちって？」

「・・・ほら、時代劇とかで、花魁なんかの後ろから、傘を差しかけてる人いるじゃん、あれ」

「花魁さんの使ってた傘にしては、随分と地味な傘ねえ」

言われれば、傘は白地で、そこには何の模様もない。

・・・と、見上げる目の端で、何かが動いた。

「ねえ・・・今、何か見えなかった？」

彼女もそれに気づいた様で、その辺りを目を凝らして見据えている。

・・・と。

「あ、ほら」

彼女の指した指の先、少し黄ばんだ白い傘紙の上を、すい〜っと黒い魚が横切って行った。

「見たっ？」

「・・・見た」

目を見張る俺達の前で、そこに幾つもの水の波紋が浮かび、傘紙が白から淡い水色へと変化を遂げる。その水の中を、今度は鮮やかな色を纏った錦鯉が通り過ぎた。

「・・・どういう仕掛け？」

「さあ・・・」

やがて、水の波紋は幾重にも重なって消えていき、傘は、何事も無かったかの様に元の白色に戻った。

「ちょっと、持たせて」

「いいけど、結構重いよ」

傘の柄を掴むと、彼女は傘をくるりと回す。

その途端、傘紙の上に、淡いピンクの桜の花びらが舞った。

「うっわ、楽しいかも」

彼女が歓喜の声を上げる。

俺たちが、しばらく桜を楽しむと、傘はまた白に戻る。そこで彼女がまた傘を回す。

宵闇に浮かぶ蛍。

蒼天の紅葉。

夕暮れに舞う蜻蛉。

降り積もる雪に足跡を残していく兎。

彼女が傘を回すごとに、幾つもの情景が浮かんで消えていく。

そして・・・

「・・・何か、凄いねえ・・・」

頭上の天の川を仰ぎながら、彼女が溜め息混じりに言った。

「うん？」

「こういうのホントに宝物っていうんじゃない？」

「そうだね」

「これ、もらってもいいのかな？」

「・・・これ売って、お金にする？」

「まさか。売るなんて勿体ない。これって、ホントの宝物だよ」

そう言って目を輝かせた彼女の笑顔は、まるで子供の様で、俺は思わず微笑んでいた。

「じゃ、うちの家宝にでもするか」

そう言うと、

「あたしたちには、随分と分不相応な言葉じゃない？」

と、彼女が笑った。

蔵から出た後、俺は、親父に土下座をして、今までの自分の態度を詫びた。この宝物の前では、そんな事はたいした事ではないという気分になっていたのだから、不思議だ。

また山程の小言のおまけ付であったが、親父は、幾ばくかのお金を渡してくれた。もちろん、これは貰うのではなく、これから何年掛かっても、返すつもりでいる。

帰り際、玄関先まで見送りに来てくれた祖母が、俺が抱えている古ぼけた傘を見て、ふと、何かを思い出した様に笑って、そして言った。

「その傘ね・・・お爺さんが、なけなしのお金、はたいて買ってきてね。戦後の何もない頃よ。遠くまで食べ物を調達しに行った筈なのに、持って帰ってきたのは、その傘一本で・・・それで、結婚して初めて大げんかしたのよ。こんなもの買ってきて、明日から何を食べるおつもりですかってね」

「・・・それで？」

「ふふ。相合傘で、仲直りってところかしら・・・」

祖母がウインクをしたのを見たのは、この時が初めてだった。

「お幸せにね」

その言葉が、俺達の前途に明るい花を添えてくれた。

【 幻灯傘 完 】